

# 花みづき

第36号 / 2022.4.1

## これからの時代の白梅図書館

白梅学園大学・白梅学園短期大学 学長  
高田 文子

大学図書館は静謐な空間というアカデミズムの象徴としての厳かさが必定でしたが、すでに時代は大きく変わり、そのありようを模索する転換点に立っています。

日本の大学評価のなかで図書館全国1位に選ばれたICU図書館の選定理由の一つは、学生一人あたりの貸し出し冊数の多さだそうです。通常の図書、授業の指定図書、データベースの検索の活用など、図書館を頻繁に利用すること。つまり、大学図書館の価値は「どれだけ利用されるか」が一番重要なのですが、本学に目を転じると、授業や実習課題のための特定の図書や絵本の貸し出しが突出することが多い傾向にあるものの、自らの視野を広げたり、学びを深めたりするための自発的な図書館活用は弱いように思われます。現在の白梅図書館は、限られた条件のなかで、展示や配置の工夫によって、学生を誘い、訪れた者が足を止めたり手を伸ばしたりしたくなる魅力を生み出そうとするスタッフの思いが感じられます。学生が「図書館を頻繁に利用する」ことを勧奨するためには、必要性だけではなく、空間への好意感や、そこにつなげ導く教員の工夫が求められることとなります。

あらためて大学の機能を考えますと、教育、研究、そして社会貢献だといえます(学校教育法第83条)が、本学は、この3領域の機能がバランスよく交錯循環しながら、社会の発展に寄与していくことを将来的にも描いています。そのために、大学図書館にはどのような役割(支援)が期待されるのでしょうか。大学図書館全体の課題と方向性の一般論を踏まえながら、本学の特性に鑑みた展望を考えてみたいと思います。

教育支援としては、授業関係の図書、知的好奇心を刺激・拡張する多様な領域の図書とそれらを目的に応じて活用できる可変的な空間が理想です。例えばラーニング・コモンズ



ですが、授業やゼミを通しての実感から、場所や物的環境を用意するだけでは必ずしも活性化につながらず、学修支援の教員や院生がいつでもアクセスしやすい距離にすることが必須だと考えます。また、データの概念がますます広がる時代にあっては、それを読み解く情報リテラシー教育も図書館による支援機能の一部となりますし、コロナ禍がもたらしたニューノーマルの視点からは、オンライン授業や講座のアーカイブと利用の方策も急がれるかと思えます。

研究支援としては、現在も行っている機関リポジトリによる研究成果の発信とともに、本学に必要なリサーチ・コモンズを精査していくことが必要でしょう。

記録媒体の多様化に伴って、利用ツールも空間も図書館というハードウェアの壁を超えて拡張します。つまり、機関ネットワーク、知識・情報・データへのアクセスなどにおいて利用者へ便宜供与しつつも、知的財産が散逸しない仕組みが必須になります。一方、紙媒体としての図書は、その匂い、感触も含めて独特の世界に誘うわけですが、記録媒体の多様化に伴って、これからは、紙媒体と電子媒体の特性を理解した使い分けが進むでしょう。本学の蔵書の特徴である絵本や紙芝居については、実習時の教材としてだけでなく、その世界を味わったり、仲間と共有したりするためのプレゼンテーション空間があれば、もっと書棚から引き出されるようになるでしょう。自分のペースで絵本をめくったり戻ったりする楽しみを、子どもの感性に近づいて知ろうとするならば、電子図書では不可能です。

社会人の間では、自己変容をめざした読書やオンライン読書会が広がっており、会員制図書館(イベントや読書会に無料で参加できるしくみ)が進化しているといえます。主体的に学び続ける時代にむけて、読書を習慣化する力の養成も大学に求められています。

## 図書館の思い出

学生の皆さんがもっている図書館のイメージはどのようなのでしょうか。図書や雑誌を借りることができる、調べ物をしたり、落ち着いて勉強ができる場所など人それぞれの用途があると思います。白梅学園大学・白梅学園短期大学には図書館があり、身近に利用することができます。大学にいらなくても様々な検索ができます。こういった環境が保障されていることは非常にありがたいことです。

以前私が児童福祉施設に勤めていたころは図書館のありがたみを身にしみて感じたものです。福祉現場の目の前で起きていることを理解し、子どもの権利を擁護していくにはその分野の知識と技術が求められます。この課題に応えていくためには日々学習していくしかありません。それを助けてくれたのが図書館と福祉に携わる仲間でした。

私は高校卒業後地元企業に就職し、社会人として生活をしていました。その後で教育学部に入学しましたので、小学校から高等学校を通じて図書館とはあまり縁がなかったと思います。図書館をよく利用するようになったのは大学2年生の頃でした。

当時学生は大学の2年になるとゼミの授業を選択受講することになっていました。私が選択したゼミでは1947年に制定された「教育基本法」の成立過程を検討していました。47年「教育基本法」は、戦前国家が独占していた教育権を国民へ解放し、国家主義と軍国主義の教育から平和と民主主義の教育への教育価値の転換を目指すものだとされていました。このことを自分たちの目で確かめてみることからゼミが始まりました。

手がかりは、文部省・教育法令研究会「教育基本法の解説」



図書館ホームページの「利用状況照会」で借りている本の確認と延長・予約ができます。



短期大学 保育科 教授  
安形 元伸

という冊子でした。この研究会では戦後の教育理念をどう考えるかが一つの論点になっていました。「解説」では、「教育基本法」の前文に「人間の育成」を用いたのは、「過去においては国民ということが人間より先に言われたが、よき国民たるには、まずよき人間」でなければならないという考えがあったからだとして述べられていました。ゼミ内では、この点について徹底的に調べていくことになりました。そのことがきっかけで図書館を頻繁に利用するようになりました。

ゼミは毎週水曜日の3時間目でした。3時間目から図書館で調べ、資料を読み、夕方まで議論します。その後研究室に戻り成果を報告します。それが終了した後、「ゼミは夜開く」という合言葉で、大学近くのお店に場所を移動し、第2ラウンドの議論が始まるのです。図書館とゼミで鍛えられたことが今でも私の財産になっています。

図書館は学術情報の基盤施設として、大学の教育・研究を支えています。私も学生時代に図書館職員の方々に学習の助けをしていただきました。学生の皆さんにもこれまで以上に図書館を積極的にご利用いただき、図書館をより身近に感じていただけたら大変うれしく思います。

### ▶安形先生おすすめ図書

- 『エミール』上,中,下 ルソー著, 今野一雄訳, 岩波書店, 1962年
- 『普通教育とは何か』武田晃二, 増田孝雄著, 地歴社, 2008年

## 図書館探検のすゝめ

図書館は知的に探検できるのはもちろん、物理的にも探検できる場所と言えるかもしれません。

私にとっての最初の図書館は、生まれ育った街の市立図書館です。その市立図書館は赤茶の外観が落ち着いた雰囲気、大きな窓が印象的な建物でした。母に幼稚園のあとに連れて行ってもらって読んだ絵本コーナーや、15時になると司書さんたちが読み聞かせてくれる「おはなしのもり」で、お気に入りの『ぐりとぐら』シリーズや五味太郎さんの絵本を繰り返し読んで、聞いて、過ごした記憶がうっすら蘇ります。

私の探検の記憶は、そのあとからです。成長するにつれて、絵本コーナーから児童書コーナーへ、文学や歴史などのコーナーを開拓して順調にテリトリーを広げていきました。ある時、いつも行かないエリアへ行ってみようと思いつきます。自分の身長は何倍もの高さの天井まで届く本が並んでいる壁を、ずーっと眺めながら途方もない（と感じられた）本の群れに緊張しました。そして静かに、ゆっくりと到達した1階の奥のエリアは、薄暗く、個別の机とライトが備えられているレファレンスコーナーでした。利用者はあまり多くなく、人気が少ないとりわけ静かな場所。そこは正確には何歳から使えるものだったのか覚えていませんが、とにかく規則的にも雰囲氣的にも小娘の侵入を拒む「大人専用」の場所でした。レファレンスコーナーだけが大人専用で、その壁を埋める禁帯出のきらきらした立派な辞典たちはもちろん読むことが出来たのかもしれませんが。しかし、「大人専用」の場所を覗き込むのもちょっとドキドキしながら、「大人になったらここを使うんだ」と



子ども学部 子ども学科 准教授  
山本 由紀子

いう決意を胸に、私の探検はそこで一旦終わりました。その後、20歳でその街を離れ、十分大人になってから一度だけ利用し、やっとすべて開拓することができました。まだ、ちょっとだけドキドキしました。

それから幾度も引越しましたが、今思うと住んだ街の図書館に一度は必ず行っていたように思います。そしてその度に壁一面の本を眺めながら、静かに、ゆっくりと図書館を開拓しました。もちろん、ドキドキしながら。自分が行った場所について、私はよくテリトリーを広げる、という表現をするのですが、まさに図書館をテリトリーとしたいのかもしれません。

図書館の独特の静謐に、もしかしたらちょっと尻込みをしたり、苦手だと思ったりする人もいるかもしれませんが。でもその静謐が探検のドキドキをさらに高めてくれるスパイスです。ぜひ図書館を我が物とする探検の先、わくわくするお宝の本を見つけてみてください。



最新おすすめDVDも視聴できます。

### ▶山本先生おすすめ図書

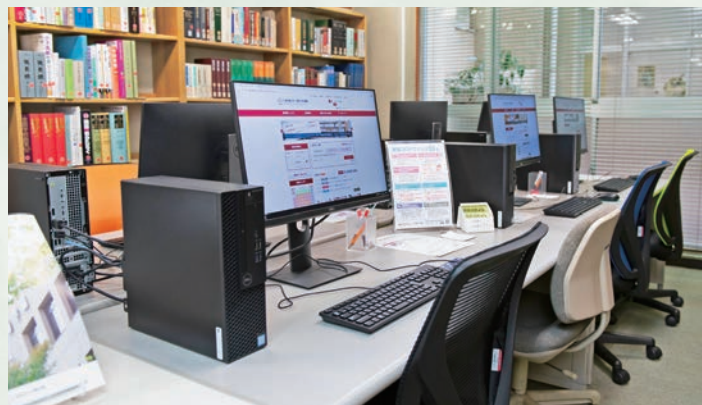
- 『音楽の生存価』福井一著、音楽之友社、2005年
- 『ヨーロッパ文化と日本文化』ルイス・フロイス著、岡田章雄訳注、岩波書店、1991年
- 『民主主義』文部省著、角川ソフィア文庫、2018年
- 『若き科学者への手紙：情熱こそ成功の鍵』エドワード・O・ウィルソン著、北川玲訳、創元社、2015年
- 『統計学は最強の学問である』西内啓著、ダイヤモンド社、2013年

## 生きている本

本は生きています。もちろん、本当に生きているわけではなく、同じ本を繰り返し読むと、その時々境遇によって、本から響いてくるものがまるで違い、あたかも本が生きているかのように感じられる、という比喻です。

高校生のころの私の心にはまったく届かなかった本に、中島敦の『山月記』があります。現代文の授業で読みました。虎に変身してしまったかわいそうな人の残念な話、程度の薄い印象でした。近所の文学館で最近たまたま目に留まった『山月記』を手にとると、中身は何も変わらないはずなのに、全く違うものが見えてきます。「己の才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧、刻苦を厭う怠惰」「人生は何事も為さぬには余りに長い、何事かを為すには余りに短い」。テーマがそこかしこに散りばめられていて、自分自身の生き方について考えさせられます。

私には、離れて暮らす二人の息子がいます。一人は大学院で数学を学び、一人は野球で進学しています。仕事と子育てに追われる年月を経て、自分の時間は自分のもの、という出産前には当たり前だったものが戻ってきました。そうなったのが、ちょうどコロナパンデミックが勃発した2年前の春のことでした。自粛期間中、しばらくの間は空いた時間に本を読んだり、自由気ままな時間を目的もなく過ごしたりすることが新鮮でした。子育て中に蓄積した大量の本とも、いわゆる断捨離によってお別れをし、以前は考えられなかったような悠々とした贅沢な時が流れていきました。そんな中で、これからまだ長いかもしれない人生、もう一度学びたいと思うようになり、今に至ります。その時期に考えたことと『山月記』の内容に似たものを感じた



各自のスマートフォンからでも蔵書検索等可能です。

## 大学院 子ども学研究科 子ども学専攻 修士課程 2年 矢後 淳子

から、今回読んで面白く感じられたのかもしれませんが。

小川洋子の『博士の愛した数式』は、初回は最後まで読み切らなかった、私に響いて来なかった本です。しかし最近読んでみると、数学博士の、子どもへの大きな愛が静かに描かれていることに気がきます。阪神タイガースの江夏投手が引退した記憶が残っておらず、毎回「今日こそ江夏が登板するかもしれない」と思い込む、記憶障がいのある博士に話を合わせる親子の心の美しさも際立ちます。選手時代の新庄剛志も登場します。後に彼が“ビッグボス”になっていることなど、執筆時に作者は想像もしえなかったことでしょう。数学を学ぶ息子と、野球に没頭する息子のいる私に、「今回は読んでね」と、優しさや癒しを届けるために、「数学」「野球」という私の気を惹く題材をぶら下げ、わかりやすいようにあちらから言い寄ってきてくれたようにすら感じられました。

変わらぬ姿を保ちながらも、本は現実世界を省みさせ、想像力を膨らませてくれます。映る姿を変えて、まるで生きているかのように。

昨年度、大学院のほとんどの授業がオンラインで行われました。私が対面で参加した授業は4月の年度始め3週間のみで、その後は月に1回大学に行くか行かないかでした。大学の図書館へは2回しか行ったことがありませんが、郵送貸出により年度を通じて幾度となくお世話になりました。梱包の際に使う何本ものテープは全て端が折ってあり、開封時に剝がしやすい工夫が毎回なされていました。顔は見えないのに温かさを感じさせてくださる、そんな素敵な司書の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

### ■ 主なデータベース ■ (一部学外アクセス可)

- < 日本語論文 > CiNii Research、  
医学中央雑誌 医中誌 Web、医学文献検索 メディカルオンライン、  
日経 BP 記事検索サービス
- < 外国語論文 > PsycINFO、PsycARTICLES、Academic Search Elite、  
Child Development&Adolescent Studies
- < 新聞 > 朝日新聞クロスサーチ、読売新聞 ヨミダス歴史館、  
毎日新聞 毎索
- < 百科事典 > ジャパンナレッジ、ブリタニカオンライン、  
Grove Music Online

図書館ホームページの「データベース」より、オンラインで利用できます。

## 「本『を』読む・本『で』読む」

皆さんは、本が好きですか。本を読んで知識を得るより、自分で体験して学ぶ方が好きですか。知識の獲得方法や理解の仕方にはもちろん個人差があります。本のジャンルや長さの好みも、当然ながら様々です。しかし、本の「読み方」にもその人の人となりが見られることを、皆さんはご存知でしょうか。

本の読み方には、その人の一部があらわれます。読み聞かせで言えば、子どもに同じ本を同じように読んでいても、その子の読み聞かせられ方はさまざまです。そしてそこに、その子どもの気質や特徴が多分にあらわれているはずで、私事で恐縮ですが、我が母に聞いたエピソードを紹介したいと思います。私には4つ下の弟がいて、幼い頃、私にも弟にも母は同じように本を読み聞かせてくれていました。そのときの反応や行動などが違いすぎて面白かった、とのことでした。具体的には、私は、母が読み飛ばしたり読み間違えたりすると、そこを生意気にも突っ込み、再度読み直しをさせ（！）、何で登場人物がそのようにふるまったか、母親に質問する、など、読んであげる相手としては本当にタチの悪い(?)子どもであったそうです。一方、弟はとにかく次の展開が気になり、母がそのページを読み終える前に小さな手で何度もめくろうとしたそうです。次から次へと進めたがる弟と、何とか読ませたい母親との攻防戦。それが毎晩続いて大変だった、とのことでした。いずれもおとなしく読み聞かせをさせてくれるきょうだいではなかったのですが、その本の読み方の様子が、何だか現在の職種や生き方にも関連しているようです。



各教員おすすめ図書・執筆図書は図書館に所蔵しています。ぜひご利用ください。



子ども学部 発達臨床学科 准教授  
江上 園子

私は、ひとつのことに興味・興味や疑問を持つとそれが例えばマニアックなものでも追究せずにはいられない不器用な研究者となり、弟は、とにかくじっとしておらずにいろんな業種や立場の人と次々に交流を持ち、日本中を飛び回っている落ち着きのないビジネスマンとなりました。「二人とも、あのときのままの大人になったんやな。」と父から未だにからかわれています。

白梅の卒業生さんの多くは、きっと子どもたちに読み聞かせをする機会や場を持つことがあるでしょう。大人数の子どもたち相手では難しいかもしれませんが、ひとりひとりに読み聞かせてあげる場合、そのときに本「を」読むだけでなく本「で」読むことも可能かと思えます。つまり、その子どもの特徴や性格などの一端を把握できる可能性があるということです。そう考えると、1冊の本が提供してくれるものは、内容を超えて、時空を超えて、時代を超えて、無限に広がっていきます。それこそが、本の魅力のひとつだとも思うのです。

### ▶ 江上先生おすすめ図書

- 『チョコレートの実』 キャロル・オフ著、北村陽子訳、英治出版、2007年
- 『もの食う人びと』 辺見庸著、角川文庫、1997年
- 『アメリカーナ』 上、下 チママンダ・ソグズィ・アディーチェ著、くぼたのぞみ訳、河出書房新社、2019年
- 『砂の女』 安部公房著、新潮文庫、2003年
- 『体は全部知っている』 吉本ばなな著、文春文庫、2002年



# 古田足日 研究

## 調査のいま、これから

### インタビューチーム



プロジェクトメンバー  
子ども学部 子ども学科 教授 仲本 美央

古田足日研究プロジェクトチームの研究計画と調査への意欲とは裏腹に、“予定が未定”という言葉の通り、昨年同様に研究2年目となる2021年もまた、コロナ禍の影響で大きく苛まれた1年間であった。

当初の計画では、本年度内に9名の研究協力者に対してインタビュー調査を実施する予定であった。しかしながら、コロナ第4波の影響により年度当初の日程調整が困難となり、調査がやっとスタートしたのは9月頃であった。最初のインタビューとしてご依頼させていただいたのは白梅学園大学・白梅学園短期大学名誉学長汐見稔幸氏。続いて12月までの間に、児童文学評論家・日本児童文学者協会理事長である藤田のぼる氏、子どもの文化研究所事務局長である鈴木孝子氏へのインタビューを依頼し、3名が終了した。生前の古田足日との交流場面を回想しながら、在りし日の姿をまざまざと語る各人の表情や心情は、時間が進むごとに熱を帯びてくるものであった。

古田の思想や信条、考えだけではなく、多方面で活動をしてきた様子と、その中で自らに生まれた問いを常に関係者と共に妥協することなく繰り返し追求め続けたその生きる道筋が、どれほどまでに周辺の人たちに影響を与えて

### 関係者の視座から捉える 古田足日の子どもへのまなざし

きたのかが伝わってくる。また、その語りの内容から、今日における子どもが育つ社会に向けて一光を照らす貴重な情報にもなるものが含まれていた。それは、現在、本研究プロジェクトに取り組む我々をはじめ、子どもを取り巻く社会全体への宿題とも感じられるものであった。これらの内容が映像資料として収められたということは歴史的資料価値になるであろうと考える。その価値をより一層高めるためにも、本プロジェクトに取り組む我々が現在の研究の歩みを止めずに一歩ずつでも進んでいくことが、重要な責務であると感じている。

当初の計画では、2,3月においては遠方の研究協力者へのインタビュー調査を数名予定していたが、コロナ第6波の影響により断念せざるを得ない状況になった。世の中の状況が落ち着き次第、研究を再スタートし、これら貴重な映像資料の社会発信を目指していきたい。



2021年12月15日(水) 鈴木孝子氏(一般財団法人文民教育協会子どもの文化研究所事務局長)へのインタビュー(インタビュアー:加藤理、仲本美央)

# プロジェクト



## 寄贈資料の可能性を掘り起こす



2021年11月28日(日) 藤田のぼる氏(日本児童文学者協会理事長)へのインタビュー(インタビュアー:高田文子学長、佐藤宗子、仲本美央)



2021年10月6日(水) 汐見稔幸氏(白梅学園大学・白梅学園短期大学名誉学長)へのインタビュー(インタビュアー:佐藤宗子、西山利佳、仲本美央) 右側は、古田文学について考察した藤田氏の卒業論文。





「絵本ナビ」より

# 児童文学の歴史を繙く

## 文献調査チーム

### 共同作業から見えてくる古田氏の姿

本題に入る前に、私自身が本研究プロジェクトにメンバーとして参加させていただくこととなった動機に触れておきたい。

研究メンバーにと声をかけていただいたときに躊躇がなかったと言えば嘘になる。しかし、古田氏と同郷であり、蛸壺に陥りそうであった状況から脱して視野を広げるため、また5親等と遠縁であり会ったこともないが児童文学者が親族にいたこと（後に古田氏とも親交があったことが分かった）、他分野だからこそ何かしらの貢献ができるのではないかと等の不純かつ楽観的な思いがスタートであった。その思いがいかに安易であったかを思い知らされることになる。

古田氏の蔵書が本学に搬入されて約2年、文献チームが始動して約1年半になる。文献調査として、これまで古田氏が主に作業をされていた机の後ろにある棚を最優先で取り組んできた。この棚の入力作業をようやく終えることができた。入力できた書籍や資料等は約3,000点と、蔵書数の約1割程度ではあるが、着実に前進している。

所蔵されていたものの一部を紹介すると、児童文学関連の書籍はもちろんのこと、保育・教育・発達等の子どもの



古田氏の書き込み等があるか1冊ずつついでに確認する白梅生。

2014年6月に亡くなった  
古田 足日氏について

1927年愛媛県生まれ。  
早稲田大学露文科中退。児童文学作家・評論家。

主な作品

『おしれのぼうけん』、『ダンブえんちょうやっつけた』（いずれも童心社）、『ロボット・カミイ』（福音館書店）、『モグラ原っぱのなかまたち』（あかね書房）、『新版宿題ひきうけ株式会社』、評論『児童文学の旗』（いずれも理論社）、評論『現代児童文学を問い続けて』（くろしお出版）など多数



プロジェクトメンバー

子ども学部 家族・地域支援学科 准教授 井原 哲人

成長・発達、生活や支援者に関するもの、子どもの権利に関連するもの、被害だけではなく加害の側面をとらえる戦争・平和に関するもの、民話や伝承等の昔の子どもの生活をとらえたもの、子どもに関連する地域で取り組まれている活動の会報等、実に多岐にわたっている。他方、蔵書の経路が分かるものが多くある。新聞の切り抜きが本の見返しに貼られていたり、謹呈の短冊だけではなく送られてきた手紙もはさまれたり、古田氏との関係性が垣間見られるのも興味深い。

古田氏自身の作品の改稿経過が分かる貴重な資料も見られた。ただ、私にとって、もっと貴重なのは、文献の入力作業から派生する古田氏に関わる話である。他の研究メンバーの論考等が出てきて思い出話をうかがえること、「この資料は〇〇の時期で、△△に取り組んでいた」「この小説は趣味で集められていた」等、生前の氏の人となりに触れる機会は、この研究を進めていく上での楽しみでもある。

昨年末から、新たに児童文学専攻の博士課程を修了された方がアルバイトとして入力作業に加わってくださり、スピードがあがっている。どのような貢献ができるのかは非常に心許ないが、少しでも古田氏の業績から学び、社会に貢献できるように努めていきたい。



# プロジェクト 2021-2022

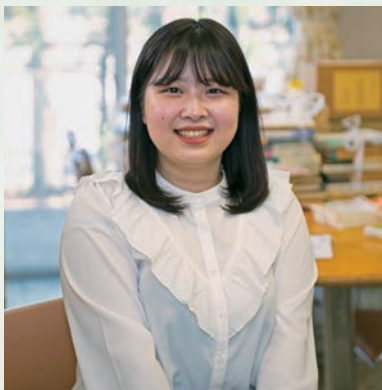
## 図書館チーム

自分では選ぶことのなかったジャンルの本にたくさん出会うことができました。

コロナ禍でアルバイトの収入が減るなかで、授業も忙しく、特別支援学校、小学校と2つの実習を控えており、なかなか新しいアルバイトを見つけることが難しい状況でした。そのため、授業の合間や空いた時間にできる図書館アルバイトに応募しました。作業後、フードパントリーも利用させていただき、食品はもちろん出費のかさむ日用品もあり、一人暮らしの私にとってとても助けになりました。

古田足日さんの寄贈資料整理作業にも携わらせていただきましたが、私が産まれるずっと前の作品や資料がとても多く、ひとつひとつ見てみると教育の移り変わりや、流行が見て取れ、とても面白かったです。日本の絵本だけではなく世界の絵本もあり、見ていてわくわくしました。古田さんの代表作『おいしいのぼうけん』を読むと、怖いという感想をもつ児童がいると思います。私が子供の頃にこの本を見ても、同じように怖いという感想をもったかもしれません。しかし、今読んでみると、先生たちが子どもたちと真剣に向き合う姿や、自分の保育園の頃の記憶が蘇ってくるような感覚になるところが、怖いではなくとても魅力的だと感じました。

古い本や資料、自分では選ぶことのなかったジャンルの本にたくさん出会うことができ、とても充実していました。また私はサークルに入っていなかったので、先輩や後輩と関わることがなかったのですが、図書館アルバイトを通して素敵な先輩や後輩と仲良くなることができました。大学4年間でとても貴重な体験ができました。



子ども学部 発達臨床学科 2022年3月卒業  
進路決定先:東京都特別支援学校教諭 村山 優夏



## ～図書館アルバイトを経験して～

古田足日さんの寄贈資料本の仕分け作業から、寄贈リスト作成・データ入力に携わらせていただいています。1冊1冊入力していく中で、気づいたことは、戦争に関する子どもが読むような本や雑誌、大人が読むものまで幅広く収集していたんだということです。中には戦時中の子ども関係の資料があり、とても驚きました。今後も新たな驚きに出合えることが楽しみです。

コロナ禍でなかなか図書館に行く機会がなかったので、アルバイトをきっかけに図書館の書籍の配置や自分自身の借りたい・興味のある書籍の配置を大まかに覚えることが出来ました。図書館アルバイトを通して、たくさんの専門書や絵本が置いてあることがわかり、特に絵本は様々な年齢に対応できる種類があります。私のおすすめする絵本は、幼稚園実習の際に借りた『どんぐりころちゃん』で、絵本を読み進めていく中で歌もあり、子どもたちも興味津々に読み聞かせを聞いてくれていたのでおすすめです。ぜひ実習や授業の際に皆さんも活用すると良いと思います。将来は、障がい児施設か保育園に就職したいと考え、ゼミ活動・ボランティアを頑張っています。



子ども学部 発達臨床学科 3年

# 図書館おすすめスポット

1階 雑誌・新聞コーナー  
過去問題集コーナー

仲本ゼミ おすすめ絵本  
コーナーもあります  
(地下階)

## ■教養基礎・発展演習、専門ゼミナールに対応した資料を多数用意

図書館1階の雑誌・新聞コーナーでは最新の研究論文や実習時に役立つ内容が載っている保育・教育系雑誌のほか科学やファッションなど教養や娯楽に関わる雑誌も設置しています。

新聞コーナーでは主要新聞の朝刊・夕刊を取り揃えているほか一定期間過去の日付分も保管しています。小学生向け新聞や教育関係者向けの新聞など本学ならではのラインナップが揃っています。

同じく1階には過去問題集コーナーがあります。ここでは公務員の採用試験や資格取得試験などの問題集を過去数年分から最新のものまで、数多く取りそろえています。先輩たちはここから手に取り試験対策の勉強に励んでいます。

授業や資格取得のための勉強に各コーナーをぜひご活用ください。



## ■図書館スタッフがおすすめする本コーナー（1階）

図書館スタッフが、在学生のみなさんにぜひ読んでほしい本を取りそろえています。

小説やルポルタージュ、エッセイなどの現代社会に関係するテーマや、日々の勉強に関係するものなど、様々なジャンルが並んでいます。一見、関係ないように思えるタイトルでも実は役に立つこともあります。図書館1階の閲覧席横にありますので、ぜひ手にとり知識・興味関心を深めてみてください。



## ■小学校教科書、学年別絵本、教員養成推薦書コーナー（1階）

図書館の1階階段横にコーナーがあります。各小学校で採択している国語・算数・理科・社会・道徳等の教科書と、各教科の指導要領が並んでいます。

また、先生方が推薦した小学校教諭になるために読んでおきたい本も隣にあります。貸出（1週間）もできますので、小学校教諭を目指す方はぜひこのコーナーに足をはこんでください。



## 図書（絵本） 貸出ランキング

(2021/01/01～2021/12/31)



順位	回数	書名、巻次、叢書名
1位	15回	施設で育った子どもたちの語り
2位	14回	跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること
3位	13回	たんぼぼのうたがきこえる
4位	11回	そらまめくんのベッド こどものとも傑作集
4位	11回	このまちで生きる 障害のある仲間たちの現在（いま）を未来に向けて紡ぎ続けたあさ作業所30年のあゆみ
4位	11回	育ちつづける人達 障害の現実と普通の生活のはざままで
7位	10回	いいんだよ、そのまま
8位	9回	わたしのワンピース
9位	8回	保育士採用試験重要ポイント+問題集 '20年度版
9位	8回	もこもこもこ ぼっぼライブラリ；みるみる絵本
9位	8回	だるまさんが
9位	8回	いいからいいから

2021年は未だコロナ禍が続く1年でしたが、貸出ランキングは少しでもコロナ禍以前の様相を取り戻し、レポート課題に関する図書だけでなく現場実習で使用される絵本もランキングに登場しました。読みたい本が見当たらないければリクエストも受付しています。

## ■館内の感染症対策紹介 ～ご協力をお願いいたします～



1人がけブース3席、グループ席最大3名まで同時視聴できます。



利用者同士が密にならないように閲覧席を設置しています。



使用後は清掃のご協力をお願いします。

花みづぎ・図書館についてのご意見・ご感想を図書館までお寄せください。E-mail : library@shiraume.ac.jp

図書館のホームページはこちらから <http://libwww.shiraume.ac.jp/>

